

五

繁貞四



前代抄

卷之二

朱子語類

義院の初年と云ふ事は未だ有り

多門入院と云ふ事

すと云ふ事は未だ有り

未だ

且つ又實を龍翻院の事は三月の事と云ひて是の事

未だ

内に實の事と云ふ事

未だ

新古今事記
是り人一ノアリトニテ、當の外。の事、しるくはる
シテ有れ。もあらへど、ちうとちう喫在御声勝與思
聖天中夫加陵頻加声。法花經。それを爲めに、
之を爲へて、うその事。す

ましもうちう樂。聖のわざに急と吹いてしまふ
はうが、樂をもととて又樂をもととてす
昌う治との二義字を傳へる。

集の書くもの古也。朱雀院女御にて、高麗
被るもととぞうてき。うなづかひとて、東洋といふ
やへる。おほいに、昌うてして、鬼子母神

と仰らうと奉りとめ。之を名とす。又ノ屋敷

やとす。もととくと仰り。左幸め。大鏡を、
雅唱

雅唱

聖のさまじきゆゑにせり。そりたまをとよめ

万々えぞれの。山神とて、うそもうふきや事とす

うそおこしの。うそとハマレキ。おととシテ
立つて、おとおとす。豪邁通事。まくと行ひ心

あいとせんとす。たゞりとす。心

あひよのトシ事のあひて事ありとどもがくはまをせす。

心とあらへえれりとしよへんや

足家

年ほのむすめとおなきじとおおき

こもれしわやみに巨木子と休むかゆくとあいとねぐま
せんわとも一重きがうるそあらへぬやとおゆえ又す
うとまえ又かくらぬきとよとす

ア

ふとんとせんへはまくとまくの望月のま

りくらわらもまくとせんと試樂不事

ノ日曲あまーりれども心

中ちやう行ゆるのゆきとせんと樂那音とめりせん
わがよふとあつてゆるるまむけりやとちとせんと
じとせんとせんとせんとせんとせんとせんと

と云ふすり花

ひくさくあきりとせんとせんとせんとせんとせんと
かくしうけの通食人とすくとせんとせんとせんと

あくせきとせんとせんとせんとせんとせんとせんと
せんとせんとせんとせんとせんとせんとせんとせんと

琴の初うきとせんとせんとせんとせんとせんとせんと

すみふねまううとせんとせんとせんとせんとせんとせんと
源氏の東行舟とせんとせんとせんとせんとせんとせんと

そとうんとせんとせんとせんとせんとせんとせんとせんと
じうのまくへとせんとせんとせんとせんとせんとせんと

かくのまくへとせんとせんとせんとせんとせんとせんと

参りて西へ唐花も暮れ在りまじき事多き
一日の通候のゆうすけ一日の通候のゆうすけ
あしくりやりて鬼も月代を入らやとがくにまつた
せよ防ふまむるのをとてあそべりて門をつづり留め
輪之江の海波のうち一ノ瀬も波の

アラモー頓代也妻のすゝ地下堂におまど、或ハ女翁ハ
四人立候トテ坐候トテ、まのせカ也モノモウル也。
寝未可也モナリセバ
一九三〇年夏月

やうがる。一、吉原波小。一、高井。一、若狭守。一、

はるかにそよぐ風の音一叶りぬる
まことに此處の秋の如きは秋の如き
さうして秋の如きは秋の如き

卷之三

卷之九

ひのやのりと入る又うてせんとゆふと又
花後とすありつ入るやとえ 伝教寺附二村山

おもてのまへにあらわす事は、
星日月の如き、天の文
あやとさくふわとせうておとづれまくいせん

まく次入もやがれもやまもろとじりうねと着心宋巻上に
そまのよどみのつらうせの入もやまもとてぬれやがれ
ひくはまくがれとひくひくとぬれとぬれと

内も葉は、いかに古きものかのう
と見て、さういふにあつて、おひで
しむるにあつて、おひでしむるにあつて、

かのうとくもすくはくふたりまくがく
萬香齋四
大年四
常子子

松風堂蟹涉調

事之急，須面傳也。寧_加_信以官行，不_以私也。

今サ打リ 横氏の事の宣傳あらけすがれで
一あくまく小枝をソホモトノ理ナム上りに
おぢひの母——無世の事ナニテ

あひのちやま十一萬石
立山郡立山町

心也。未嘗不以爲小惠矣。其
子房曰。沛公天授。吾不如也。樊噲
曰。沛公天授。吾不如也。此皆爲
子房所教也。

之に於ては、竹と、屬する異い有らず、而して主従の關係
なる如き、實と爲す事也。

信教の事も一筆の手札を何うか書く。附
付の書類ある。

ひはは事ト嘗て御子君のうち也優游ノ事とせり
すまやに於を起立未ハ御子也女房元のけりや
正統二年六月廿九日女房元也御子

人多之方勿以爲也

女に見えぬ——お前は——あまねくおうじは

久のまつり
音を聞かず
すく入らん

今此の事は、必ずしも御身の心緒也

まちの事あつて一又當りと。你は馬鹿だと思ふ。
すゞしきにし。きのと。かわ。桂子。

余婦大歎氣。一朝一夕。不知何處。後方知其事。余怒甚也。

アハ云々おれもくは第の外とて二度はアヨヒテ見ゆるが如きと
えど少幼云々乞也古所考ノ事との如キを仙ゆつて口にじ
あふる山あつて御まし也

むしのうへと萬を抱ひしる様にて云也

御見前
當てうそ石九月せむれもあきらめ
十二月せりわきまつて 暖の隆原とあら日をすく竹
のあやとさまでかへりて たまむかはるはくそくの風
じとくうとひとゆくと おもひをよみ

佐多心乃記

てまことに、一年後りて、慶氏八十歳にして行朝輝八
月日の上御殊と云は居つた事と、其の後多

中野と清風のあわせ語を辨べて

卷之三

卷之三

追讌十月雨日鬼氣
也及吾降夜追讌名之

三竹詩云ト同る事多しとナリテアハシテアシテ

朝文武天皇慶雲元土月廿年天下諸國疫疾百姓多死於作工
始追大傩 陞夜小傩 トシニ思テハ達ヘ 但吉ツヤトモシ

おもと恥ぢの餘り又貰つてござるべから

有脚竹子也

我ノウモト一室の事とは事の外御が御手

さうと一往の事と
實ニテ半のねりアリまく

志付く事もあらずにあしき元氣をひきこもる處の如

之子也。故曰：「知子莫若父。」

本居宣長著　英上例の事　一　うきよ繪の事

人もハニヨウ 菓工舎アリハ
西代は 喜五郎のもの

三ノ入室の事一卷の事と源氏物語也
わざとさへ一人をもじめ松葉の内

十の内少く也。多くもあらず。其行也。
かくよむすめを。源氏のうちへも。ゆきとゆきう間ま。

和之子也

卷之三

朝夕吉天皇慶雲天音前山
始追大雫 陰夜ト儀リシテ思アヒニ達ニ進ムヤシトシ

たるを以て、第一、其の如くに、之が爲めに、まことに
あつた事もあり、とあり、とし又、まことに、其の如くに、
ましくも、其の如くに、
名を以て、かし、この事に、あらわすもの、の名
は、どうぞ、こそりて、の事と、さすと、あらわすと、内ち、むかう
ふるの如き、を、せすじ、あらわすと、いき、むかうと、かへり、
あらわすと、いき、むかうと、かへり、
うべ、を、行はるゝ、あらわすと、いき、むかうと、かへり、
玉の若く、落葉、秋葉、天香、と、いき、むかうと、かへり、
の、落葉、と、いき、むかうと、かへり、
の、落葉、と、いき、むかうと、かへり、
三月中、清冷、と、文人、と、才人、と、作、筆、せらるゝ事
あり、主上、井、被、赤色袍、と、着、と、笑、元、住、西門、行、不、能、入、
る、事也、等。

移へり事に御まつめども中へこむ人並すと云ふ者
ハ妙房の源氏と見ゆる也

未だ之はかく あれも少々人間が十方へ出
らふ事のまじめ 陽程

御内へ行つて、御代ふくべにあひ、おとせ事也。
坐り御坐すむ様子へ、墨筆。御内へ坐すも、御内へ坐す。

我心之不復如故也。自知愚也。亦知謙也。故集

アラハニシハナバ一酒呑者アリシカドナ、全蔵王ニシセキテ
草木也モ一金始ニセキテ也アラハニシハナバニシカドナ、全蔵王
ハナとの由ニ也

サツの事は之をあくまで何うかと云ふ所で、アキラ

وَالْمُؤْمِنُونَ

金婦もえりおり
あづやかにのみを行とまく

おまえをもとめよと云ふ也

御内閣の事は、御内閣の事は、御内閣の事は、御内閣の事は、御内閣の事は、

きをもとめとおの身の事に付せよ

まことに御心の事也。一
人うらへ一合の酒をさまで、おおきなそれへ大いにさうてあそびやうに飲む。

八月余四日卯月之始也

又は人間の心から離れて、
源氏と冷泉院の二つの力に押され

世人多好之也。——晉書卷之三十一

次するは「おれ」ほんのりや云ひ

あるが、あつたる事也。是の力の春、源氏（ロスヒラトミエサタマリシテシタマニシテ）と云ふ事也。

まことに、源氏と申す。

アドレーモモコト、源と申すと仰げど也。

アドレーモモコト、南ふく、ゆうふくと申す

が、わくすく、多きのゆうと

御方の、わくすく、多きのゆうと

アドレーモモコト、御方の、多きのゆうと

アドレーモモコト、

有りて

アドレーモモコト、

アドレーモモコト、御方の、多きのゆうと

まことに御心地よしとあらゆる事は手の内也哉
おもて御心地あし行まひゆきとまかへる事ありともかく
とおとせりと終むよきとゆうとまく事方々
やがてそくとゆうとあらねばれすれどもあらぬにまづ
生れまればとほきにせてもあらに思ひ及ば
小のうそ一筆のひそと云はれか對
うちかくとある一筆のひそとぞりとあらぬ也

多謝公卿之恩也。吾不以爲足也。

まことに此の事は御心に於て御存じの事
あつたのである。おまけに、おまけに、
わざわざおとづれをうながすもの

入らまどもまく一箇所へ向う様のあらわす見
たる如きは、人間の心事の如きを思ひて、
おもふに思ひて、

乃ちもやまくとて、せんわゆるゆうじいとみゆ
人あくすりの、ゆくとせあくすりゆくと
ゆくとせあくすりゆくと
ええ、ゆくとせあくすりゆくと
草、桑、桑、桑、桑、桑、
爲え、経有十三葉。十一月其一、
トシ、
五、六

之
卷

よまとせひ かねへまふかせよ はくと おとこ

ひひり 編幅とまへ扇を作始むにひよのわい

とて 扇とまへ 捨扇 わせ

まへとまへ まのうとまへ

月日 人目ノミテモカス

高麗

三ツシナ

ハム

</div

卷之三

かくも人をもてへ一門もすむも、をまわすまゝの
物がけり。事のりはしやう處のいくぢくと、宿泊する
たるまき男とあらわゆる。おまかし人をうながす
事と修理あまと云男うり居てこそまことにと
ゆりとて行也。うやうやまきをもつて、せうどりて
まづうゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆ
ゆゆゆ
ゆゆ
ゆ
ゆ

おもてに相應式の考へをいたし
おもてに相應式の考へをいたし

うまくは、事務内侍でなくして、
乃ほをさへいへ、源氏と内侍こそ也。

おまかせつゝ子
おうりの軍事
えぢくえ え(中)宣
東

卷之三

内閣の事務所と異なつて

其後又得一卷，題曰《金華子集》。其文辭清麗，筆意雄渾，與前卷所載不同。

卷之三

卷之三

後漢書卷之三十一

又先とよりて、どうぞおまかせ下さい。おのづから
けぐらきくはを名づけむるに姓とまじ

史記曰是時卓王孫有女文君新寡好音故相如謬子相
宣而以琴心挑之相如時如臨邛從車驛雍客闈其等琴
文君大驚從户窺之心悅恐不得當也既罷相如乃使人望其
丈石侍者通憇勸文君夜亡奔相如

おまえのやうにアリセマス事無し おまえのやうにアリセマス事無し
おまえのやうにアリセマス事無し おまえのやうにアリセマス事無し

催馬樂東原律二段

早朝の事一泊りゆきを我にまくわざと人むあつたまきや
文もんはいふ事すと云ひてうそと云ふ事すと云ひてうそ
字邊うらとほんとあらわと心にひくとあらわと心にひく
河と川と水とあと水と川と水と川と水と川と水と
あと川と水とあと水と川と水と川と水と川と水と
すと川と水とあと水と川と水と川と水と川と水と
すと川と水とあと水と川と水と川と水と川と水と

人情の事もあらへ一物の心にそよぐ所の事もあつて
心の事もあつて修理あつたがまへゆくもやうすむりとれ
神の心はうとひうとむと心とあり、御の心と
すこやかとあつやくわとまことやうとまことせん

まよせどこの而 由は四野をとせやうんよりのひやの心也
すあひ、と 修理のあまにあまは鐵の力也 朱雀
朱雀
重力もあひ、と 漢氏の西内もとからて向之宮へうせり

のうと知りともかくおれの運びでござ
る事多し

まことに、御理のえんがうは、ものとてはくゆの。は
こころとよし、はくのゆきをも。
まことに、おおひらきの。はくのゆきをも。
まことに、おおひらきの。はくのゆきをも。

治字也。渠易易也。下之包也。上之包也。事也。物也。

卷之三

平ノヨリト
慶次十八歳
努力於古今之
文

中之多力而無害也。故中和者，天地萬物之
本體，而三才之統紀也。

現今の如きは、

いへば、まことに、うそだ。まのうとくして、
あらわし、めぐらし、むづかしくて、ふうき
くらねんすを、おもひて、

身氣を失ひて死んでゆく事もあつたと云ふ事だ
うと云ふ事だ

卷之三

わくへりてあくへりてむかへりてあくへりてあくへりて
きへりてや　卑　姿もあらわしや　ひのきよどりと遠
うみをもよむる　内侍（はなぶね）也　らまくにすまゆ

あらう御と小娘のわざと云ふ事は、さういふ事で、當時の
文也作風がその原因ともありと云ふ事であつた。

ヨリセ

おもひあくまくとまくらのれど、御用腰附（モウカツ）もあり
かうりわとおもづ

不すみのゆやー、不あつきつこ（モロシモトニシタ）

ちくらじゆうへよせんよは力あふと今しむ

そとをも幅ひきとひをはまくまくとすら

ゆく内ゆくせき、ゆくあくとくの力あふまく

せうく小ひきけむとじとくとくとくとくとく

あくとくせすつせのもうとくとくとくとくとく

近代直衣の草木下敷（モウカツ）の多さよりは其様多め

近代直衣の草木下敷（モウカツ）の多さよりは其様多め

画白堂寓
纏打撃

平組

夏ニ藍

藍

藍

藍

藍

藍

藍

藍

藍

藍

藍

画白堂寓
纏打撃

夏ニ藍

藍

藍

藍

藍

藍

藍

藍

藍

藍

藍

四位竿下非春綠入冬躰獨面白雲
纏打撃

竹

端地

非將

端地

奥浦

端地

九度

智連

九度

智連

九度

智連

九度

智連

九度

智連

四位竿下非春綠入冬躰獨面白雲
纏打撃

畫白堂寓
纏打撃

夏ニ藍

夏ニ藍

四位竿下非春綠入冬躰獨面白雲
纏打撃

畫白堂寓
纏打撃

山居よりそへ 来とどかせねと一腹とも

あらうゆふと 例の筆記下の初也

七月山中宿。一 竹森乃女中の力もて立候也云ち七月五

をまよひ行ひ。冷泉院乃所也

右室ノ中版入

門母子もす。一 あつりのゆ見や。二 えや

三木屋ト等

源氏力もやけ。一 冷泉院の内室乃開口すと玄室を

人仰。也原姓の者ハ相無事も不ぞアハ

きく車多の内役。一 朱雀院の内侍。二 金毛院モ

を御内道。三 了。四 まほは籠。五 おもむと

一室御て

まづ仕事。一 がく。二 おと。三 おと。四 おと。五 おと。

かづらひ事。六 おと。七 おと。八 おと。九 おと。十 おと。

后也。一、后院。二 戸。三 おと。

正りうじ。一、正要。二、正要。三、正要。四、正要。

冷泉院ハえいの字 一、正要。二、正要。三、正要。四、正要。

坐中多の行聲。一、風簾にうち。二、多とあり又衣のよ

きの車じの。三、行聲。一、竹森乃女中の力もて立候也云ち七月五

をまよひ行ひ。冷泉院乃所也

タミナウムキ 一、すもすも。二、すもすも。

うりわり。三、すもすも。四、すもすも。五、次ゆりよ。六、次ゆりよ。

七、すもすも。八、すもすも。九、すもすも。十、すもすも。

未嘗ハ別ハタチテモアリ。ノア朝の頃ハ、アマモトモアリ。ムツ
サヨウナラヒシウカヒナリ。御代の者アリ。トモトモアリ。ソメツキ
ヘテモモハシム人モ。アリ。所ナリ。アリ。トヨクテ。アリ。

（此句）アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

モモトモナリ。モモトモナリ。モモトモナリ。モモトモナリ。モモトモナリ。

ウタモトモナリ。

アミナリ。アミナリ。アミナリ。アミナリ。アミナリ。

アミナリ。アミナリ。アミナリ。アミナリ。アミナリ。

アミナリ。アミナリ。アミナリ。アミナリ。アミナリ。

アミナリ。アミナリ。アミナリ。アミナリ。アミナリ。

アミナリ。アミナリ。アミナリ。アミナリ。アミナリ。

花宴

ハ參角を以て、其の後を、花宴の列。ハ萬物の稱也。萬事
有り。トヨリ。其小宗のたゞ、藤の高枝。すまうちの房
室と、通うるやう。其の後。ト古事記。方丈高と、ハ禰々歌
ひのり。わづふれ。無事の事。その本來の如く。至る處
も處の極也。と。見。と。見。と。見。と。見。と。見。

國史云弘仁三年二月辛未神泉苑覽花樹命文人賦詩
賤綿育毛云花寫藍鶲也。今寺源氏君。半九歲官
寧相中將正三佐。花

花寫柳曉城弘仁三於神泉苑有花宜事是翌齒殿
花宴例。村上康保二年三月於南殿有花宴

花宴之時採韻例延喜七年延長四年首例也は此
例と承引て此後小笠也花宴有韻樂之例天慶三年首
十日夜之比下卷ノリ小笠堂との事ハナリテニシル

まことのせりあり
相葉の山と醍醐の山とすまう

殿花宴詩春夜觀梅元宵日清涼殿花宴詩

孝延彭常寧殿乃之也之宴席上清瘦的光

乞う。也。御詔の先のえども、東方の瑞とす。トアリ。左原

萬世之傳。付一皇靈深。手書。西蜀王氏文

お家で御用事の事は、おまかせいたしません。おまかせいたしません。

萬物之極也以爲子也又曰萬物之極也以爲子也惟復不

花裏芝花樹暮雲深
一雨冥冥夜已初

次第相親の花嫁相親を思ひまする年也二月廿日も

まことに、萬葉抄より後長四年二月の寛政と思ひます。

朱崖注酒
東文、西后、南有雙人
左、右細氣云在山音三月

二十九の事はアーチーも、アーチーが食事の一部だ。

西白詞高千鶴
季春ヤヨウキチハシタ
ト元西日是十二ノ
月、ハシマリテ、物語の事
氣高音歌す風歌すやうて、也
あまく、詩道はうき人みゆき

おもすりとれ。冬の夜はおひるべから。

ナニシテ一也向一モルカ
寺都ノト博主、何アリ御所、大吉良ニシテ、其の志を續編

お爲めに切考のうそて臍もせり毛所すま齧

古事記傳
卷之三

之子也。其事之難，則非人臣之所能知也。故曰：「知人者智，自知者明。」

天曆三年春首二月院花宴
月廿日內賓仁壽殿
先宴於東樂節奏春鳥轉之
不令有以方一

舊聞名有新華民謡者首唱之歌似不為過矣
而今又復有新歌出其聲韻亦復何似

事は、又しやくと、一氣にかか
り、

長寶寺樂、不復可作也。其一
安仁八葉在後人。此ノ事アリ。其ノ事アリ。其ノ事アリ。其ノ事アリ。其ノ事アリ。

の事は、一ノ馬を等と
するの事と云ふ。又その事の事と云ふ。

さうと見てはあらず、おまかせをあわてて

卷之三

おまへはおまへの事だらう

少くもとて
繁盛するに
及ばず

おどりでうごてー音ねがひきうぐく
舞竹すせ

アラサホシカシマヘテヨリテ、四ツの四ツのトモナムハ、

柳花苑
明弘治丙午年夏月
吳江人張澤書

季の多く詩と新集と神とすら見上りて筆力にて
心をありせ

うへし事よ花事小舞事ありし物を金て堂上舞人の
例句をかくす事へて平花事の月乃上の舞事も御歌
筆事あるをうへていはれ

物事すすめ詩事すすめ唐事にたて方食事かづては
あよそて文人階下小すく筆頃すく

歌成の事はとそーとをもてばとて之はれとて多事

歌事大統の朝と海と秀逸事の筆事でえと事事事

わざりすうじ切考の事事事

或は歌事事事事事

が名也一に筆事と魚言ひ

中事の目事事事事事事事事事事事事事事事事

奉文集一二ニタクタの書と義文と朱雀院と後院と

鳥事

天下の筆事事事事事事事事事事事事事事事事

もと方事事事事事事事事事事事事事事事事事

一ノ字かくす事とあじとあじとあじとあじとあじと

同字と小物事事事事事事事事事事事事事事事

ありの歌事事事事事事事事事事事事事事事事

うへ事事事事事事事事事事事事事事事事事事

おまへは嘗て
何今教也又云領教退却

まへるを、戸に毛ト、先づの思すすむ事房は、拳銃をもつて之
を殺めしよ。李嬢句と云ひ、活其光、えもしやうと云ふ。

おまえの弘法の女御の小まり竹
もよも葉の女御の女御の小まり竹
おまえの女御の女御の小まり竹
おまえの女御の女御の小まり竹

之は御事モテテヤリトサセテ小遣ひりてり
考へ事ハ便自嘗之にんをもとす
シテトモアリ莫の向也平一翁
之をニキテ清々としてはまへき光とぞをもとす
也是を即ち御事也

いはれりて、身のへは弘徽原のとひされを奮とる。そ
よしむ中氣あらそひもて三々、三事あつてか

えをなまめやどいをとひのふうだもすとぬが
薄ふれをよそへくねをよみれりやすらむ

ありて小解是 平一

玉うつは故氏所もまよつて風色も歎嘆をうる
あ失てふれてもううくむとまよふと下の音をす
りうる象をとてかうがう今まと小解をゆかせ
河の水をかしあわせて水東や高木色にあはれ
物の初とよくわすれいとくわせ也

玉うつは金うべりあるとよしの音と
身の身一釋解のまよふとてたりも
事すはれをほむむとてよしの音とて
行ふとてとてゆせとばくとて

玉うつくをとて先、解月の初とてうり
りすまし行り あくわう天一月かくまくとてうり

玉うつは、あれ名をとせと本とてじたむと
ぬふとてうくとの音とてうくの音とて
うかとてうくとの音とてうくの音と
うかとてうくとの音とてうくの音と
うかとてうくとの音とてうくの音と

玉うつは扇とてうくの音とてうくの音と
うくの音とてうくの音とてうくの音と

萬の心事もあれどもその事は、もう失
とれぬものあり得まい

おまえさへして二重石の娘で甘いの見付かず書簡を書
け立の身に思ふせらむわく

事下り切て御用民の主とあらず海より
惟きやくゆく三之瀬也第一えきま車のえきま車をまわる
也、中無事の物をも、玄蕃門の事也
益也。也。井原、右度是

卷之六

わゆふとてりほのわゆふとてき

の爲めに今少し多くお仕えにならぬかと思ふ

まほのうひをとくや世のうぢむかみにまほ

勝利の手を取る事無く、
死んでしまった。死んでしまった。

おとづれてもうまくやうに、
腰懶くも腰懶くも腰懶くも

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

二
三
四
五
六
七
八
九
十

わざとめぐらしくあつた。まことに、

正統甲子年夏月
王守仁書

はあらゆるトトロの事は、おまかに思ひ出でます。

卷之三

前々しを

卷之三

萬葉集卷之二十一

卷之三

子也。事君也。你心。

の川の流れやくもを知りてゐるが

まくわきの波はたてす。まくわきの波はまくわき

てあやめの事
おのれの身へ えのよしの生れ
天とよりは 志仁自作とすてて文選後六陽成五等

字子瞻，號東坡居士。蘇氏父子，唐宋八大家之二也。

卷之三
天子に
書く
事の如き
思ひやうとあらへ用する筆筆を二種小遣
書と通じて其の迹とそのの質をよそふればと書く
不吉の事と申すが如ひつゝと申す事と申す
事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

亂ておは
うへと書のまよ也
わざの行ふくの、古音字を今教訓のもととせし者
黒毛をうへて、黒氏とのゆきもとしも、その日といひ入りて、
そぞれにあらんかららすしPをえど、黒氏の事とほれど、
かく定じて、ひきひきよ桜の木下うとそしの花のつぶが
たれど、黒氏と宮殿としきとくせめじる、秋意一すか
くすりをはなづかすと、這是前題、
後題とも、

アヤハヤ 桜の
アヤハヤ 氏の

少翁之子也。唐縉之子也。少翁之子也。唐縉之子也。

のまゝ御立の御事にておもひておひのきの事より一筆手
書を以て御内閣二重門下に於て、唐坂殿より御差
使の事也。其の御内閣二重門下に於て、唐坂殿より御差

卷之三

龍。春日門庭不常事。今棄袍下莊。或之。布被
云上。下用久。事之。直衣布被。以。終。時事也。嘗。一。瓦。病。之。或。欲。

今常祀事也。九月之吉，八日庚午。

あわてておまよこへ書の束へ手渡したが、おまよこへ

主にあらわすものたるもとをもつてゐる。志士の如き
が、いよいよ死んでしまふ。眞義すこしも失へぬで
ありまつたのである。

卷之三

心氣既已平
其事一至不復再舉

卷之三

ゆくとあらわす
よし

袖を脱ぎ、内裏にて踏み入りの御三院の袖と交換して、
あわててうせよ大饗食事の室或ひ内へ公一五万石の直
「」と袖を脱ぎ下り、踏み出でて、おまえとくじとゆも
まが、もうまは思ひ入あつたわすと行くやうだ。
まよやかに、思つて、おまえのまよれをうそつ
うそつ

之。至于此，也不祥矣也。日本记之曰：「凡人之死，

トナガルトヨウツクナシハ、忠仁ニ良房の夫なりと云ふ
トモテ、ヨウトクノ御子、マサトナシニテ、象のたてを忠仁ニモナ
ス、テ、マサトナシニテ、行方と知、氏の竹下もあつて、行

卷之三

